

ヴィゴツキーの発達理論における発達の存在論的次元

学校教育開発学コース 長 澤 貴

The ontological dimension of human development in Vygotsky's developmental theory

Takashi NAGASAWA

The purpose of this article is to reform the view of Vygotsky. In the reinterpretations of Vygotsky's developmental theory, his theories about the development in ontological dimension have been overlooked and Vygotsky has been viewed as cognitive psychologist. How did Vygotsky treat the development in ontological dimension? What meanings does Vygotsky's theory about the development in ontological dimension suggest?

This article describes how Vygotsky treated the development in ontological dimension by examining Vygotsky's studies on defectology. And I find the unfinished project of Vygotsky as a Marxist in his defectology.

目 次

1. 問題の設定
2. 北米におけるヴィゴツキーの発達理論の乗り越えと展開
 - A. 70年代後半以降におけるヴィゴツキーの発達理論の展開と限界
 - B. 90年代におけるヴィゴツキーの発達理論の展開と乗り越え
3. ヴィゴツキーの発達理論における存在論的次元の発達論
 - A. 内言の発達と存在論的次元の発達
 - B. 障害学のヴィゴツキー
 - C. ヴィゴツキーの未完のプロジェクト
4. おわりに

1. 問題の設定

本論文の主題は、認知的次元の発達の理論家としてのヴィゴツキー像以外のヴィゴツキー像を見出すことである。

今まで、ヴィゴツキーの発達理論の中に存在論的次元の発達を扱う発達の理論を見出すことは出来なかった。このことは、ヴィゴツキーが存在論的次元の発達を意識していなかったということの意味しているのではない。ヴィゴツキーの紹介、解釈、展開は常に何らかのパラダイムの影響を受けてきた。例えば、1960年代の日本におけるヴィゴツキーの紹介と解釈は、教育

の近代化、体験による学習への批判というパラダイムのもと導入された¹⁾。教育の近代化のパラダイムは、ヴィゴツキーの活動の概念を見失わせていた。ヴィゴツキーを解釈と展開してきた心理学と教育学のパラダイムのクリティークの向こうに、発達の存在論的次元を扱う従来の認知的次元の発達を扱う認知心理学者としてのヴィゴツキー像とは異なるヴィゴツキーが姿を現す可能性がある。

ヴィゴツキーの発達論の中に存在論的次元の発達を扱う発達理論を見出すことは、単にヴィゴツキーの実像を探るということのみを意味しているのではない。心理学と教育学のパラダイムに深く結びついてきたヴィゴツキーの発達理論に新たな側面を見出すことは、既存の心理学と教育学のパラダイムを壊し、新たなパラダイムを産む可能性を秘めている。

本論文では、ヴィゴツキーを存在論的次元の発達を扱った心理学者として位置付けなおすという課題を探索するため三つの問いを設定した。一つ目は、80年代以降のヴィゴツキーの再評価とヴィゴツキーの発達理論の展開は、ヴィゴツキーをいかなる存在として描き、存在論的次元の発達をいかに扱ってきたのかとの問いである。二つ目の問いは、ヴィゴツキーはいかに存在論的次元の発達を扱ったのかという問いである。三つ目は、ヴィゴツキーの存在論的次元の発達を扱った発達論はどのような意味を持っているのかという問いである。

ヴィゴツキーを自己や自我、アイデンティティの発達という存在論的次元の発達を扱った心理学者とし

て位置付けなおすという課題を探求するため、本論文では The collected works of Vygotsky vol.2²⁾の障害学におけるヴィゴツキーの研究を検討した。

2. 北米におけるヴィゴツキーの発達理論の乗り越えと展開

ヴィゴツキーの発達理論は、70年代後半以降北米において再解釈、再評価、展開された。70年代後半以降の「ヴィゴツキー・ルネサンス」と呼ばれるワーチ³⁾らによる、ヴィゴツキーの発達理論の解釈や展開と、90年代初頭移行試みられたヴィゴツキーの発達理論の展開や、乗り越えとは趣が異なっている。70年代後半以降の「ヴィゴツキー・ルネサンス」は、反認知主義、反計算主義という文脈のもとでヴィゴツキーの発達理論に脚光を当てた。「ヴィゴツキー・ルネサンス」は、ヴィゴツキーを認知心理学者として復興させた。一方、90年代初頭以降のヴィゴツキーの発達論の展開や、乗り越えは、新たなヴィゴツキー像を見出し、ヴィゴツキーを認知心理学者として浮かび上がらせた心理学と教育学の文脈そのものを超克する試みであった。

A. 70年代後半以降におけるヴィゴツキーの発達理論の展開と限界

70年代後半以降に興った「ヴィゴツキー・ルネサンス」とよばれるヴィゴツキーの発達理論の展開と拡張の流れは、従来の認知心理学や認知科学とは異なった認知的発達理論をヴィゴツキーの発達理論に見出そうとした。認知心理学や認知科学が、あたかも個人が単独で存在し、単独の内で発達が起こるとみなしてしまう「原子論的な個人観」を基盤としているとして⁴⁾、他者との関わり、文化との関わりといった個人と外界とのインタラクションの中に発達を捉えようとした。そしてさらに、文化人類学や言語学といった他の学問領域への接近を見せたことも特徴であった。

コール⁵⁾は、ヴィゴツキーがルリアとともに中央アジアで行った調査⁶⁾を再検討し、推論などの高次心理機能の文化・歴史的な文脈への依存性というテーマをヴィゴツキーの発達理論から引き出した。高次心理機能の文化・歴史的な文脈への依存性というテーマは、人間の認知の文化間での相対的な比較を行う比較認知研究⁷⁾という領野とヴィゴツキーを結ぶ回路を開いた。

エンゲストロム⁸⁾は、ヴィゴツキーの分析のユニットと活動という概念に注目した。エンゲストロムは、主体の対象へ道具を用いた働きかけである活動という

分析のユニットを拡張した。エンゲストロムは、主体—道具—対象という三項に新たにルール、共同体、役割という三項を加え分析のユニットを拡張した。この分析のユニットを用いたエンゲストロムの活動理論は、孤立した個人と対象との関係や親—子、教師—子という二者関係における発達に限定されていたヴィゴツキーの発達理論を超え、共同体の文化や共同体内での人間関係との関わりで個人の認知的発達と、共同体の変容を捉える視座を提供した。

そしてワーチ⁹⁾は、晩年のヴィゴツキーがことばと高次心理機能の発達との関係の研究に専心していたことを重視し、ヴィゴツキーの発達理論の言語論的な展開を図った。ワーチは、言葉と高次心理機能の発達との関係という未完に終わったヴィゴツキーのプロジェクトを補完する目的でヴィゴツキーの発達理論とバフチンの言語学との融合を図る。「ことばのジャンル」、「声」といったバフチンの概念を用いることによってヴィゴツキーのことばを用いた行為が「対話」として位置付けなおされる。「ことばのジャンル」という概念は、ことばという心理学的道具にいくつかのレパートリーを提供した。「声」という概念は、実体化された主体を意味するのではなく、用いる「ことばのジャンル」や対話者との関係で生成変化するエージェンシーを意味し、構成され複数化する主体という視点を提供する。「対話」という概念は、語義から意味へというヴィゴツキーが見出した発達のプロセスを主体と意味とが構成される他者とのネゴシエーションの過程として位置付けなおす視点を提供した。

「ヴィゴツキー・ルネサンス」は、認知心理学者としてのヴィゴツキーに光を当てた影にヴィゴツキーの発達理論のもつ他の側面を潜ませた。アンチとして立てた認知心理学、認知科学の計算主義、認知主義のパラダイムが、計算能力、言語能力、スキルの発達といった認知的次元の発達の理論をヴィゴツキーの発達理論の中に見出すことに専心させた。エンゲストロムの活動理論が含意として持つ共同体の変化や、人間関係の変化という社会的次元の発達、ワーチの「声」という概念が含意する主体の構成、変容という存在論的次元の発達を論じるためのエッセンスをヴィゴツキーから汲み出すことは出来なかった。

B. 90年代におけるヴィゴツキーの発達理論の展開と乗り越え

認知心理学者として飾り立てられたヴィゴツキーの像の影に隠れたヴィゴツキーを明るみに出す試みが90

年代に始まった。認知的発達に傾斜した発達観を捉えなおし、認知心理学者としてのヴィゴツキーの像を揺さぶり、新たなヴィゴツキー像を見出そうとする試みである。

レイヴとヴェンガー¹⁰⁾は、学習観の捉え直しを図る中で、発達に社会的、存在論的次元があることを見出し、発達観を捉えなおし、ヴィゴツキーの発達理論の中に社会的次元の発達を見出そうとした。

レイヴとヴェンガーは、学習を実践的共同体への参加であるとし、認知的な変化のみではなく、共同体内での人間関係の変化や共同体内での参加者のアイデンティティーの変化も発達と捉えようとする。レイヴとヴェンガーは、ユカタン産の産婆、ヴァイ族とゴラ族の仕立て屋などの徒弟制の文化人類学的研究を行った。この研究で彼らは、社会的実践における新参者の共同体における社会的、存在論的位置付けを「正統的周辺参加」と言い表し、新参者と他の参加者との人間関係、アイデンティティーの変化の過程を「周辺の参加」から「十全的参加」への移行の過程として描いた。

共同体内での人間関係の変化という社会的次元における変化を発達と捉えるレイヴとヴェンガーの発達論は、ヴィゴツキーの「最近接発達領域」の再解釈に反映されている。レイヴとヴェンガーは、「最近接発達領域」の解釈を三つのカテゴリーに分類している。第一のカテゴリーは、教授学的解釈のカテゴリーと呼ばれ、教授などの外的支援の発達の先導性と重要性とを導く解釈である。第二のカテゴリーは、学習者が単独で取り組むときの問題解決能力とより経験を積んだ人との共同で問題解決に取り組むときの問題解決能力の差であるというヴィゴツキーの「最近接発達領域」の説明を重視している。第三のカテゴリーは「文化的解釈」のカテゴリーと呼ばれている。このカテゴリーは、教授によってもたらされる知識と、子どもがもともと持っている知識の差であるとして「最近接発達領域」を解釈する。ヴィゴツキーの「科学的概念」と「日常概念」¹¹⁾の区別がこの解釈を導いている。第四のカテゴリーは、「集合主義的」、「社会レベル」の見方をする解釈であり、レイヴとヴェンガーの取る立場である。このカテゴリーは、「最近接発達領域」を日常的な実践と歴史的に新しい実践との間の距離であるとして解釈し、共同体の変容、共同体内での人間関係の変容という社会的変容のプロセスに焦点を当てている。

エンゲストロム¹²⁾は、社会的次元の発達を視野に入れ、認知的発達のみを視野に入れるヴィゴツキーとピアジェの発達観の乗り越えを問うた。

エンゲストロムは、ピーター・ヘッグの自伝的小説『ボーダーライナーズ』¹³⁾の主人公たちの変化に注目し、主人公たちの共同体に対する関係の変化、主人公たちの人間関係の変化を発達と捉えようとする。『ボーダーライナーズ』自体は、学校の制度的な文脈を描くことが主題となっている。更正という目的のため実験的に私立のエリート校へと転入させられた3人の子供たちの学校への問い、学校への関わり方の変化、三人の人間関係の変化が描かれる。三人はそれぞれ病気や自殺、または自らの手で殺害することによって親を失っていた。三人のエリート校への実験的な編入は、三人になぜここにいるのかという問いを抱かせ、器物の損壊や教師への障害など逸脱した行動へと彼らを導く。なぜここにいるのかという問いは、「透明に磨き上げられたトンネル」と表現される学校の制度的な文脈が生み出すアイデンティティーの政治学を主人公たちに見出させる。そして、主人公たちは学校の時計台を破壊するという行動に象徴的に見られるような学校の制度的な文脈への反抗と破壊という逸脱した行動へと三人を導き、別の学校へと去っていく。

エンゲストロムは、学校の制度的な文脈を明らかにするという目論見よりもむしろ三人の変化に注目し発達論を捉えなおす。『ボーダーライナーズ』の主人公たちの変化の分析からエンゲストロムは、以下の三点の問いをヴィゴツキーとピアジェの心理学へ挑戦として投げかけた。(1) 発達とは、部分的には古いものの破壊的な拒絶なのではないか、(2) 発達とは、集団の変化ではないか、(2) 発達とは、ボーダーを交差する¹⁴⁾ような水平方向の動きなのではないかという3点である。『ボーダーライナーズ』の主人公たち3人は、何かを習得しているわけでも、個人として変化しているわけでも、何かのスキルを伸ばしているわけでもない。彼らは、学校という制度を壊そうとし、三人の連結を強め、他の学校からこのエリート校へ、そしてまた他の学校や施設へとボーダーを移動していく。

認知的次元の発達から、社会的、存在論的次元の発達へと視座を広げた発達観は、レイヴとヴェンガーによる「最近接発達領域」の解釈のように、ヴィゴツキーの発達理論の中に、社会的次元の発達を扱う理論を見出した。しかし、存在論的次元の発達は、ヴィゴツキーの枠組みを超えたところで論じられ、存在論的次元の発達論をヴィゴツキーの理論の中に見出し発展させることは出来なかった。

3. ヴィゴツキーの発達理論における存在論的次元の発達論

90年代のヴィゴツキーの発達理論の展開は、ヴィゴツキーの発達理論に共同体の変容や人間関係の変化という社会的次元の発達を見出させた。しかし、アイデンティティーや主体といった自己の意味付けに関わる存在論的次元の発達は、ヴィゴツキーの文脈を離れて論じられた。存在論的次元の発達は、ヴィゴツキーの発達理論の中ではどのように論じられているのだろうか。忘れられた存在である存在論的次元の発達を論じるヴィゴツキー像を掘り起こしてみたい。

A. 内言の発達と存在論的次元の発達

近年ヴィゴツキーの発達理論の中に存在論的次元の発達を論じるヴィゴツキーを見出そうとする試みがなされはじめた。

ワーチ¹⁵⁾は、高次心理機能の内化のプロセスを定式化したヴィゴツキーの「高次心理機能の発達的一般的法則」の中にアイデンティティーの形成という発達の存在論的次元の理論の展開の可能性を見出そうとする。「高次心理機能の発達的一般的法則」は、記憶、計算能力、そして内言といった高次の心理機能の社会的起源を言う法則である。ワーチは、エリクソンのアイデンティティーの形成のプロセスとヴィゴツキーの高次心理機能の形成のプロセスがともに社会的起源をもっていることにエリクソンとヴィゴツキーの相同性を見出した。

佐藤¹⁶⁾や中村¹⁷⁾は、ヴィゴツキーの内言の発達の理論の中に、自我と自己の発達を読み取っている。佐藤は、ヴィゴツキーの「外言」と「内言」の差異と、「外言」と「内言」の関係の探求、そして対人関係を表す心理内水準から、自己内の関係を表す心理内水準への移行、すなわち内化に関するヴィゴツキーの探求の中に、自我と自己の発達を読み取っている。さらに、佐藤¹⁸⁾は、自己内関係を探求していたフロイトの心理学を再構成するという自覚にたつた存在としてヴィゴツキーを見なし、内言の発達の理論を自我と自己の発達の理論であると見なしている。佐藤と同様に中村も、ヴィゴツキーの内言の発達論と自我の発達論との関係を論じうる可能性に言及している。

しかし、ヴィゴツキーの「高次心理機能の発達的一般的法則」、内化、そして内言の理論を自我や自己の発達の理論として展開させる回路は、まだ可能性の枠

に止まっている。存在論的次元の発達を論じるヴィゴツキーの発達理論は、ヴィゴツキーの夭折による未完のプロジェクトとして見られている。

B. 障害学のヴィゴツキー

ヴィゴツキー¹⁹⁾は、障害学(defectology)という聞きなれないことばを使って、身体的、精神的障害を持った子どもたちの発達と教育について論じている。日本においてヴィゴツキーの障害学は、その一部が1982年に『障害児発達論集』²⁰⁾として出版されただけでその全貌は明らかにされていない。またアメリカにおいても、1993年に The collected works of L. S. Vygotsky Vol.2 “The fundamentals of defectology”が発刊されるまで障害学の全貌は明らかとならなかった。

ヴィゴツキーの障害学の探求は、ヴィゴツキーのソビエト国内における名声が高まり、理論的に円熟味を増す1924年から31年頃までに渡って成された。そして、ヴィゴツキーの発達理論の重要なエッセンスを含んでいる。障害学は、社会・文化的な発達の生物学的発達に対する優位性、媒介手段の発達における重要性、発達における言葉の重要性といった、ヴィゴツキーの発達論の中核をなすアイデアでもって、障害を持った子供の発達と教育が論じられている。ヴィゴツキーは、障害を持つ子どもの発達が身体的障害や、精神的障害などの生物学的なハンディキャップに制限付けられないとし、生物学的なハンディキャップを乗り越え、補完する(compensate)教育が可能であるとする²¹⁾。そして、生物学的なハンディキャップを乗り越え補完する教育は、普通教育とは異なった尺度、方法で成されるべきであり、ハンディキャップを補完する教育を普通教育と差異付け、特徴付けるのが道具などの媒介手段の普通教育とは異なる使用法であるとヴィゴツキーは論じる²²⁾。

ヴィゴツキーの障害学の探究を基礎付け特徴付けているのは、発達の独自性(uniqueness)という発想である。ヴィゴツキーが、パブロフの動物実験にもとづいた条件反射学説を批判するとき²³⁾、類人猿の発達に関するケーラーの研究と人間の発達との比較を行ったとき²⁴⁾、人間の発達は動物や類人猿の発達と異なることを示すという人間の発達の独自性の追求という眼目があった。人間の発達の独自性へのヴィゴツキーの探求は、障害学においては、障害を持たない子どもたちからある能力、機能を差し引いた存在として障害を持つ子どもを見なす心理学、教育学への批判として顕在化している。ヴィゴツキーは、障害を持つ子どもの発達

の独自性を言い、障害を持った子どもたちの発達を障害を持たない子どもの発達と同じ尺度で捉え、障害を持つ子どもを障害を持たない子どもよりも劣った存在として見なした上で構成される教育方法を否定している²⁵⁾。

ヴィゴツキーが障害学において展開した発達理論は、特殊な事例の発達を扱った特殊な発達論として障害児発達や特殊教育の領域のみに閉じ込められる発達理論ではない。人間の精神発達の独自性と具体性に対するヴィゴツキーの探求が、障害を持った子どもの発達という具体的な対象を見出させた。ヴィゴツキーは、彼の発達理論を特徴付ける多くのエッセンスをちりばめ障害学を展開し、人間の発達の独自性を追及したヴィゴツキーの発達理論の具体的な姿が、障害学において現れているとみるべきであろう。

C. ヴィゴツキーの未完のプロジェクト

障害学においてヴィゴツキーは、障害を持つ子どもの人格²⁶⁾の発達を論じている²⁷⁾。ヴィゴツキーが言う人格は、人が生得的に持つ性質ではない。ヴィゴツキーは、人格を全体(whole)、全体性(wholeness)、存在の本質(entity)といったことばで語る²⁸⁾とともに、人間関係や、文化的な環境によって、社会・文化的に構成された人の内面性を意味させている。

障害学においてヴィゴツキーは、身体的または精神的なハンディキャップが、障害を持つ子どもの人格の発達を特徴付けるとは考えていない。ヴィゴツキーは、障害を持つ子どもの発達にとって身体的、精神的なハンディキャップを二次的な意味を持つものとしか見ていない。身体、精神的なハンディキャップという生物学的な側面の発達における影響を二次的であるとし、社会・文化的な文脈の発達に対する影響を重視するヴィゴツキーの一貫したスタンスが見られる。

障害それ自体は、直接影響を持っているのではなく常に二次的な影響をもっている。「既に述べたように、子どもたちはハンディキャップを直接的に認識するのではない。子どもたちは障害に起因する困難を自覚する。障害を持つことの直接的な結果は、子どもの社会的な地位を低下させることである。つまり、障害を持つ子どもは障害をもつこと自体で社会的な逸脱として扱われる。人々との関わりの全て、社会のあらゆる領域でのその人の位置付けを決定する環境の全て、人生の参加者としての役割や運命、そして日常生活の社会的な意味全てが障害をもつことによって変わってしまう²⁹⁾。

ヴィゴツキーは、社会・文化的な文脈を、障害を持つ子どもの社会的な位置付けを決定する社会的な抑圧であるとして具体化し、障害を持つ子どもの人格の発達を論じるスタンスを準備した。

社会的な抑圧との関係で人格の発達を捉えようとするヴィゴツキーのスタンスは、アドラーの個人心理学によって深化する。ヴィゴツキーは、社会学的な問題を心理学の問題との掛け渡しの方途をアドラーに求めている。

「アドラーによれば、適応へと導く身体的な障害は、子どもの特別な心理学的な位置付けを作り出す。障害が子どもの発達に影響をもたらすのはこの特別な位置付けによってのみである。障害による子どもの低められた社会的な立場の結果として発達する心理学的なコンプレックスをアドラーは「劣等感コンプレックス」と呼んだ³⁰⁾。

ヴィゴツキーはアドラーの「劣等感コンプレックス」という概念を、社会的な抑圧の個人に及ぼす影響である社会的な位置付けを心理学的な位置付けと捉えなおすために用いている。

社会学的問題を心理学的な問題へと捉えなおすことは、ヴィゴツキーにとってもっと大きな意味を持っている。障害を持つ子どもに対する社会的な抑圧に目を向けさせたのはマルクス主義者としてのヴィゴツキーのスタンスである。ヴィゴツキーは、マルクス主義者としてのスタンスをさらに心理学者として展開しようとする。ヴィゴツキーは、「人格への社会的な刻印」である性格の発達を、「社会的な位置付けに対する闘争(struggle)」と呼ぶ。

「性格は人格への社会的な刻印である。それは硬化し、結晶化した人格の典型的な現れ(behavior)である。つまりそれは、社会的な位置付けに対する闘争なのである³¹⁾。

「社会的な位置付けに対する闘争」というマルクス主義的な課題を性格の発達を論じることによって心理学として展開しようとするヴィゴツキーの意図が見取れるだろう。

しかし、マルクス主義的な課題を心理学の領域において展開するというマルクス主義の心理学者としてのヴィゴツキーのプロジェクトは未完に終わっている。ヴィゴツキーは、「社会的な位置付けに対する闘争」としての人格なり性格なりの発達を位置付けるのみで、その具体的なプロセスを描くことは出来なかった。

4. おわりに

本論文では、認知的次元の発達理論家としてのヴィゴツキー像以外のヴィゴツキー像を見出すことを主題としてきた。そのため、従来あまり明らかにされることのなかったヴィゴツキーの発達理論における存在論的次元の発達を扱った理論に焦点を当てた。存在論的次元の発達を扱うヴィゴツキーを見出したとき、どのようなヴィゴツキー像を立ち上げることが出来るのかを探った。

80年代、90年代のヴィゴツキーの再評価、展開の検討を通して明らかになったのは、認知的次元の発達理論へと傾斜したヴィゴツキーの理論であり、ヴィゴツキーの未完のプロジェクトとしての存在論的次元の発達を扱う理論であった。認知心理学者としてのヴィゴツキー像を作り上げてきた80年代以降のヴィゴツキーの再評価、再解釈の流れに対して、社会的次元の発達を扱うヴィゴツキーを見出し新たなヴィゴツキー像を作り出そうとしてきた。しかし、新たなヴィゴツキー像を作り出そうとする流れの中にあっても存在論的次元の発達を扱うヴィゴツキー像は見出せなかった。

障害を持つ子どもの発達と教育を論じた障害学の中に、存在論的次元の発達を扱うヴィゴツキーの理論を見出した。このことは心理学者としてのヴィゴツキーに存在論的次元の発達という新たな側面を付け加え、認知心理学者としてのヴィゴツキー像をさらに大きくさせることを主張しているのではない。存在論的次元の発達を扱うヴィゴツキーを通して見て取れるのは、「社会的な位置付けに対する闘争」というマルクス主義的な課題に挑もうとするマルクス主義者としての姿である。ヴィゴツキーは、疎外や搾取といったテーマとも通じる「社会的な位置付けに対する闘争」というテーマを人格の発達という存在論的次元の発達を扱うことによって心理学者として展開させようとしている。ヴィゴツキーの存在論的次元の発達を扱う理論を通して見えるのは、マルクス主義の心理学者としてのヴィゴツキー像であった。

マルクス主義の心理学者としてのヴィゴツキー像を明らに出すことには二つの意味がある。

マルクス主義者としてのヴィゴツキー像は、存在論的次元の発達理論と同様に捨象され、忘れ去れた存在である。特に日本においては佐藤³²⁾が指摘するように、ヴィゴツキーを毛沢東主義などの文脈で理解することはあってもマルクスの文脈で理解することはなかつ

た。ヴィゴツキーの理解を、認知主義的な文脈から切り離し、マルクス主義の文脈に位置付けなおすための回路を障害学においてマルクス主義の心理学者として人格の発達を論じるヴィゴツキーの中に見出すことが出来るだろう。

「社会的な位置付けに対する闘争」というマルクス主義的なテーマを心理学的に位置付けなおすという、マルクス主義の心理学者としてのヴィゴツキーの未完のプロジェクトは、現代的な意味を持っている。ヴィゴツキーは、障害を持つ子どもの人格の発達を「社会的な位置付けに対する闘争」として位置付けた。ヴィゴツキーが見出す障害を持つ子どもの人格の発達は、ラベリングやポジショニングという社会的な抑圧の影響を強く受ける、自己に対する意味のネゴシエーションの過程としてみなすことができよう。自己に対する意味の自己と社会とのネゴシエーションの問題としてこのプロジェクトを展開し、精神分析学への接近するという回路を用意したことは、現代のマルクス主義の展開とも共通点を持ち、アイデンティティーの政治学として存在論的次元の発達を展開するにあたっての示唆を提供している。

残された課題は、可能性として論じられてきた内言の発達と自己や自我の発達とを結ぶ回路を具体的な形で示すことである。障害を持つ子どもの人格の発達を「社会的な位置付けに対する闘争」として、自己に対する自己と社会との間でなされる意味のネゴシエーションと捉えることはできたが、このプロセスをより具体的に内言の発達のプロセスとして描くことは今後の課題として残されている。

(指導教官 秋田喜代美助教授)

註

- 1) 佐藤学 1999 学びの対話的实践へ [学びの快楽] 世織書房 pp.37-79
- 2) Rieber, R. W. & Carton, A. S. "The collected works of L. S. Vygotsky Volume 2 The fundamentals of Defectology (Abnormal psychology and learning disabilities)", Plenum Press, 1993.
- 3) 例えば, Wertsch, J. V. (Ed.) "The concept of activity in Soviet psychology", M. E. Sharpe, 1979. Wertsch, J. V. (Ed.) "Culture, communication, and cognition: Vygotskian perspectives", Cambridge University Press, 1985. Wertsch, J. V. "Vygotsky and social formation of mind", Harvard University Press, 1985など。
- 4) Wertsch, J. V. "Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action", Cambridge University Press, 1991.
- 5) Cole, M., "The selected writings of A. R. Luria", M. E. Sharpe, 1978.

- 6) ルリア「認識の史的発達」森岡周一訳 明治図書 1976
- 7) Cole, M. & Scribner, S. "Culture and thought: A psychological introduction", 1974
- 8) Engestrom, Y. "Learning by expanding: An activity-theoretical approach to the developmental research", Orienta-Konsultit Oy, 1987.
- 9) Wersch (1991) Ibid.
- 10) Lave, J. & Wenger, E. "Situated Learning: Legitimate peripheral participation", Cambridge University Press, 1991.
- 11) 「生活概念」とする訳もある
- 12) Engestrom, Y. Development as breaking away and opening up: A challenge to Vygotsky and Piaget, paper presented at ISCRAT in Geneva 1997.
- 13) Hoeg, P. "Borderliners", Delta, 1994.
- 14) 異なる共同体間の移動を「バウンダリー・クロッシング」としてエンゲストロム (Engestrom, Y., Engestrom, R. and Karkkainen M, 1995, Polycontextuality and boundary crossing in expert cognition: Learning and problem solving in complex work activities, *Learning and Instruction*, vol. 5, pp.319-336) は表している。ある能力やスキルの習得や上達のみを問題とするノーヴィス/エキスパート観を水平方向のモデルとし、「バウンダリー・クロッシング」を水平方向のノーヴィス/エキスパート観としてエンゲストロムは導入する。
- 15) Penuel, W. R. & Wertsch, J. V. Vygotsky and identity formation: Sociocultural approach, *Educational Psychologist*, 1995, 30(2), 83-92.
- 16) 佐藤 前掲書(1999)
- 17) 中村和夫 「ヴィゴツキーの発達論 —文化—歴史的理論の形成と展開」東京大学出版会, 1998
- 18) 佐藤学 「教育法学」岩波書店, 1996
- 19) Rieber, R. W. & Carton, A. S. "The collected works of L. S. Vygotsky", Plenum Press, 1993. 以下 The collected works Vol. 2 と表記
- 20) L. S. ヴィゴツキー「障害児発達論集」大井清吉他訳 ぶどう社 1982
- 21) Vygotsky, L. S. The fundamental problems of Defectology, 1929 in The collected works Vol. 2, pp.29-51
- 22) Ibid.
- 23) Vygotsky, L. S., *Thinking and speech*, 1934, in Rieber, R. W. & Carton, A. S. "The collected works of L. S. Vygotsky" Volume 1, Problem of General Psychology, Plenum, 1987 pp.39-285
- 24) Ibid.
- 25) Vygotsky (1929) Ibid.
- 26) 個人、人格を意味するロシア語の личность は、英語に翻訳しにくい語とされ、ヴィゴツキーの言う人格がどのような意味を持っているのか近年まで明らかとならなかった。ヴィゴツキーの言う人格は、人間関係や、文化的な環境によって、社会、文化的に構成された人の性質を意味している。
- 27) Vygotsky (1929), Ibid.
- 28) Ibid. p.36
- 29) Ibid. p.35
- 30) Ibid. p.35
- 31) Vygotsky, L. S. The dynamics of child character, 1928 in The collected works Vol. 2, pp.153-163, p.156
- 32) 佐藤 前掲書(1999)